

ボローニャ歌劇場

プッチーニ

トスカ

第3幕の舞台スケッチ

いま世界でいちばん熱い指揮者と当たり役の名歌手がそろって、これが《トスカ》の決定版!!

《トスカ》ほど濃いオペラはない。陰謀、拷問、強姦、殺人、処刑、自殺と、あまりに多くの状況が降りかかり、主要な登場人物4人は身動きがとれないまま相次いで命を失う。観客は正味2時間のうちに、いくつものオペラを観たのに匹敵するほど、数々の展開と感情を味わう。

これだけ内容が詰まった世界を、プッチーニは緊張感の高い音楽で埋め、抒情性も絶妙に加味した。そんなオペラを世界最高水準で生き活きと描ける指揮者がオクサーナ・リーニフだ。事実、彼女が2021年に英国ロイヤル・オペラ・ハウスで指揮した《トスカ》は、圧倒的に称賛された。

そんな稀有な才能のもと最高の歌手がそろおう。トスカはこの役が十八番で、欧州中心に高い評価を得るマリア・ホセ・シーリ。恋人のカヴァラドッシは世界的スターテノールで、やはりこの役が十八番のマルセロ・アルバレス。警視総監スカルピアはドスが利いた美声が圧巻のアンブロージョ・マエストリ。《トスカ》の決定版、ここにあり。

世界がもっとも注目する女性指揮者が音楽監督に
いまボローニャ歌劇場は最高の旬を迎えている!!

生活も文化も水準の高さがイタリア屈指で、ユネスコの「音楽創造都市」にも認定されている——。ボローニャはそんな町だから、歌劇場に寄せられる期待も大きい。錚々たるキャストを集めて上演されるオペラ公演は、オペラの殿堂と呼ぶにふさわしい水準の高さを誇る。それはこれまで6回におよんだ来日公演でも証明されており、現地では900ほどの客席をめぐるチケット争奪戦が繰り返される。

オーケストラの実力も高く、多くのマエストロがイタリアで三指に入ると語る。そしていま、この名門はあらたなステージに入った。2022年からウクライナ出身のオクサーナ・リーニフを新音楽監督に迎えたのである。その前年、女性としてはじめてパイロイト音楽祭の指揮台に立ち、絶賛されたリーニフは目下、世界最注目の指揮者。そんな旬の才能に率いられた最高のタイミングで4年ぶりの来日が叶う。

香原斗志(オペラ評論家)

PUCCINI
OPERA
TOSCA

マリア・ホセ・シーリ(ソプラノ)

ウルグアイのイタリア系の家に生まれ、ドラマティックな声求められるオペラで、国際的にもっとも重要視されているソプラノのひとり。常連であるミラノ・スカラ座のほか、ウィーン国立歌劇場や英国ロイヤル・オペラ・ハウスなど欧州の主要劇場をホームグラウンドとする。とりわけトスカ役は各地で称賛されている。

マルセロ・アルバレス(テノール)

アルゼンチンで家業の家具工場を営んでいたが、30歳で一念発起してイタリアに渡りオペラ歌手に。またたく間に世界中の主要歌劇場や音楽祭を席巻した。ベルカントやフランス・オペラを歌いながら声が自然に熟成。現在はドラマティックな役柄がレパートリーの中心だが、艶のある輝かしい声はアルバレスだけのものだ。

アンブロージョ・マエストリ(バリトン)

イタリアのパヴィア出身。リカルド・ムーティに見いだされ、ミラノ・スカラ座でヴェルディの主要な役を次々と歌ったのち、メトロポリタン歌劇場、ウィーン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラをはじめ世界の主要劇場に進出。品格ある深い声、エレガントなフレージング、圧倒的な音量などいずれも一流だ。

オクサーナ・リーニフ(指揮・音楽監督)

ウクライナのリヴィウ州出身。地元の音楽院に続きドレスデン音楽大学で学び、2013/14シーズンからバイエルン州立歌劇場でキリル・ペトレンコのアシスタントを務める。17~20年はグラーツ歌劇場と同フィルの首席指揮者としてオペラと交響曲の双方で腕を磨き、その後は欧米の主要な劇場やオーケストラへの客演が目白押しだ。21年、パイロイト音楽祭で指揮した《さまよえるオランダ人》は大絶賛された。22年1月よりボローニャ歌劇場音楽監督。

(プロフィール紹介:香原斗志)



第2幕の舞台スケッチ